

自宅出産を選択した女性の体験

—5人目を自宅出産した女性の語りを通して—

柴田 恵美¹⁾・渡邊 典子²⁾・久保田美雪²⁾

1) 医療法人 竹山病院

2) 新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

An Experience of the Woman Who Chose the Home Birth

:Through the Narration of the Woman Who Gave Birth to Her Fifth Baby at Her Home

Emi Shibata¹⁾, Noriko Watanabe²⁾, Miyuki Kubota²⁾

1) TAKEYAMA HOSPITAL

2) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF NURSING

キーワード

自宅出産、主体性、リラックス、自然、体験

Key words

home birth, independence, relax, natural, experience

I. はじめに

近年、出産の場は病院や診療所などの施設内がほとんどであり、自宅で出産する人々は少数派である。戦前においては自宅分娩がほとんどであり、現代の状況とは全く逆転していた。しかし、戦後、GHQによる法制度の改革などにより、出産の多くは自宅から病院や診療所などの施設内へと移行されることとなった。1960年では、施設内での出生は804,557で総数の約50.1%、自宅での出生は801,484で総数の約49.9%となり、その数はほぼ半々となった。1990年では、施設内での出生は1,220,138で総数の約99.9%、自宅での出生は1447で総数の約0.12%となりこの傾向は現在まで続いている。

しかし、前述したように少数の自宅出産^{注1)}を志向する人もいる。これは、出産そのもののあり方や出産における女性の主体性などに目が向けられるようになったことや、女性が自分自身で出産をどのようなものにしたいか、誰と一緒にどこで出産を迎えるかなどの選択

肢が広く考えられるようになってきたためと考えられる。このような中で自宅出産は、普段の生活の場や時間の流れの中にお産があり、産婦や家族が最も自然でリラックスした環境でお産を迎えることができること、産婦自身の力で出産がおこなわれることから出産への満足感や達成感が高まるなどのメリットがある。

現代、出産の場として医療機関を選択している人々が多い中で、自宅を選んだ人は、その決定においてどのような考えや思いを持ち、自宅出産の体験を通して何を思い、どのようなことを感じているだろうか。本研究では、自宅出産を選択した女性の妊娠から出産に至るまでの体験の語りを通し、自宅出産の意味を見出し、出産援助の一考としたい。

II. 研究目的

自宅出産を選択した女性の妊娠から出産に至るまでの体験を現象学的に浮き彫りにし、総括的に記述することである。

Ⅲ. 研究方法

- 1) 研究デザイン：現象学的アプローチによる質的研究。
- 2) 研究対象：研究参加者は、2007年に第5子を自宅出産した女性1名。(第1子、第2子、第3子、第4子は、施設分娩^{注2)})
- 3) データ収集方法：半構造的面接方法によるインタビューを2008年5月に実施。面接は参加者の自宅で行い、面接回数は1回、面接時間は72分であった。面接内容は、「妊娠が判明した時」「自宅出産を決定した時」「妊娠期」「分娩期」と時間的な流れにそってその時に感じたことや思ったことを自由に語ってもらった。その中で、話しの流れを変えないように注意しながら「その時何を思ったか」「何がそうさせたのか」などの質問をし、相手の言ったことを繰り返し、それを相手が再認識することで内容を深めるように努めた。面接内容は、参加者の承諾を得た後、テープに録音した。
- 4) 分析方法：分析・解釈はColaizziの7段階¹⁾の手法を参考に行った。
 - ① 参加者の逐語記録の全部を読み、それらに対して何らかの印象をもち、そこから何らかの意味をとる。
 - ② 個々の記述に戻り、自宅出産に直接関係する語句や文を抜き出す。(有意な陳述の抽出)
 - ③ 個々の有意な陳述の意味を詳しく説明するよう努める。(定式化された意味)
 - ④ 個々の逐語記録についてこのプロセスを繰り返し、定式化された意味の集合体を「テーマ群」として体系化する。また、これらのテーマ群が妥当であるか確認するために、テーマ群を元の記述全体と照らし合わせてみる。
 - ⑤ こうして得られたすべての結果を研究しているテーマの「総括的な記述」に統合する。

⑥ この総括的な記述を出来る限り明確に「基本構造を特定した」陳述に定式化するように努力する。

⑦ 以上の分析過程において、研究の妥当性を高めるため、研究者間で研究の分析内容を共有し、確認、検討を行い、修正することを繰り返した。

Ⅳ. 倫理的配慮

参加者に研究の趣旨を説明し、得られたデータは本研究以外の目的で使用しないこと、個人や施設名、地名が特定されないようにプライバシーの保護には厳重の注意を払うこと、個人の不利益になるようなことは話す必要がないこと、いつでも本研究の参加を取りやめることができることについて口頭と文書で説明し、承諾と署名を得てから開始した。

Ⅴ. 結果

自宅出産を選択した女性の妊娠から出産に至るまでの体験として、【1. 妊娠を子どもへの生きる教育のチャンスに変える準備を始める】【2. 自宅出産への期待】【3. 自宅出産を実現させるための努力と意識や行動の変容】【4. 子どもの生まれてこようとする力を信じ、幸せを体感できた自宅出産】【5. 家族の変化から自宅出産の成果を感じる】以上5つの主テーマが見出された。

次に、それぞれの主テーマを構成しているテーマについてデータと共に記述する。なお、データについては、H G明朝Eで示し、参加者の語りをなるべくそのままの形で挿入しているが、分かりにくいところは単語を省いたり、言葉を補った。

主テーマ1. 妊娠を子どもへの生きる教育のチャンスに変える準備を始める

a. 与えてもらった妊娠という思いが、妊娠継続を後押しする

「5人目ってのは全然考えてなかったんだけど…で、ぽっとできて、できたって分かったとき、うち4人目のときにけっこう産むかどうかするかっていうのを旦那とけっこう話しをしてたから…できたら産むのが当たり前っていう感じもなかったから…ただ妊娠ってそんなに簡単にできるものじゃないし、なんだろう…与えてもらってる感？があるから、ほんとの意味で授かったっていう…のがあるから…産むのが当たり前っていうか…」

参加者は、妊娠が判明したとき、全く予期していなかったため、最初は妊娠に対して戸惑いの気持ちがあった。しかし、その妊娠が与えられたものであり、子どもを授かったという思いから妊娠の継続と出産を決定した。

b: 生きる教育をするチャンスであると捉えた妊娠

「ずーっとやってきてるのが生教育、生きるほうのね。生まれるっていう字のほうの生教育をずっとやってきたから、5人目の妊娠を通して子どもたち4人に生きるっていうのをどうやって伝えていくかというのがあったから…そっちの方が先だったかもしれない。」

参加者は、これまで家庭で行ってきた子どもたちへの生きる生教育をこの妊娠によってできると考えた。

主テーマ2. 自宅出産への期待

a: 子どもたちが生命を感じ、自分を大切にしてほしいという思い

「子どもたちに出産を見せてあげたい、って。生まれるっていうこと、まあ自分たちも生まれてきたんだけど…。それがどういふとか、お父さんお母さんがどんな気持ちで赤ちゃんを迎え入れるか、(中略)っていうのを

教えてあげたい、見せてあげたいっていうのは根本にずーっとあるから。」

参加者は、子どもたちへ両親がどんな気持ちで児を迎え入れるのか、どうやって出産をするのか、ということを教えてあげたいと思っていた。

b: 出産は生活の一部であるという思い

「生活の中に出産があるっていうのが自宅出産はものすごく、こう…子どもたちにも感じてもらえるっていうか…自分自身もそう思えるっていうのもあったから…。自宅出産を決めてからはもう、(中略)家族の生活の中の一部なんだよ、っていうことを教えてあげたかったのかなあ。」

参加者は、出産を普通の家族の生活やライフサークルの一環としての出来事であると捉え、自宅出産によって、そのことを自分自身も感じることができ、子どもたちにも感じて欲しいと思っていた。

c: 出産のすべてを夫や子どもとともに体験したいという思い

「病院だとすごく限定される、出産するにしても頭の上のほうにいて、『医療処置をしているところには絶対立ち入らないでくれ』っていうのは他の子たちの出産のときに、まあ旦那にしても子どもたちを立ち合わせたときにしても一言目に言われたことだったから。助産院だとそういうのがないよーってのは聞いてただけど、自宅だともっとそれが無い。」

参加者は、今までの病院出産を振り返り、家族の立会いや出産体験の共有における制限に不満を抱いていた。病院より助産院、助産院より自宅はその制限がより少ないと考えていた。

主テーマ3. 自宅出産を実現させるための努力と意識や行動の変容

a. 自宅出産への壁

「自宅出産のマイナス面でやっぱ嘱託医がないっていうのが1番なんだけど。(中略)自分で嘱託医になってくれる先生を探さなきゃいけない。嘱託医とも色んな話しをして、『どういう部分を私は請け負えばいいんですか?』って言われるし。『何かあったら結局他の病院とかにいつてくださいつていう結果になってもいいですか?』って一言目に言われて。自宅出産でのリスクとかすごく自分が勉強しなきゃいけない。」

参加者は、自宅出産遂行のために自分で嘱託医を探さなければならないこと、自宅出産のリスクの勉強など、簡単にはいかない自宅出産までの道のりを実感していた。

b. 自分の身体のコントロールやセルフケア能力(意識や行動)の高まり

「やっぱり自宅出産っていうものを意識し始めてからは、すべてが全部自分でコントロールしなきゃいけない?(中略)全部、自分でケアしていくっていうかコントロールしていかなきゃいけないから。体重とかも増えないように自然と気をつける。食事も特に意識してたわけじゃないんだけど。中毒症とか切迫になったらできないのはすごく言われるから、自分で管理しなきゃって。」

参加者は、妊娠期の異常の出現が自宅出産不可能とイコールであることを十分に自覚し、自己の身体のコントロールやセルフケア能力(意識や行動)が自然と高まったと感じた。

c. 胎児との一体感を感じる

「お産って自分のものなんだって。ほんとの意味でお腹の子を守るのは自分なんだって思われる。だから、なおさらお腹の子とのやりとりも増えてくるのかな。助産師さんも手で触って、今こういう体勢なんだよって

うのを教えてくれるから、自分で触ったりしながら感じて。すごくなんか、一体感?を感じてた。(中略)ほんとに意識が1つ。常に(胎児と)行き来するようにはしてたかな。」

参加者は、積極的に胎児への思いをはせ、意識的なつながりを持つことで、まだ見ぬ子どもとの絆を深めていった。そして、胎児を守るのは自分しかないという思いと胎児との一体感を感じていた。

d. 自分が「産む」という主体性の出現

「自宅出産っていうのは、医療の手がない状態で産むから、自分と子どもの力が全てっていうのがあったから、2人のまゝ自分とお腹の子と2人の意識とか力とか、コンビネーションみたいな、そういうのは意識させられた。自分も楽に産みたいし、自分が楽に産めるってことはお腹の子どもがすごく楽に出てこれるから。(中略)体重管理をするのが当たり前みたいな感じ。周りから言われての意識じゃないから、自分の中での意識だから、ほんとにねえ自宅出産決めてからは、ほんとにねえ自分が産みだす?(中略)お産っていうものがほんとの意味で自分の事として捉えてる?ほんとに産まされるんじゃないかって産む?そこが一番変わったところかな?」

自宅出産では、胎児と自分の力および意識のコンビネーションがすべてであり、「産まされる」のではなく自分が「産む」、「産み出す」という妊娠・出産に対する主体性を実感していた。

主テーマ4. 子どもの生まれてこようとする力を信じ、幸せを体感できた自宅出産

a. 施設分娩体験を振り返り、自宅出産のメリットを確認する

「すごく、でも、ねえリラックスする。普通に生活しているところで出産してるってことは不思議だったんだけど、ほんとに自然。すごい産むことに対する恐怖感はまった

くないし。ほんとにリラックスしか言えないねえ。医療器具にはまったく囲まれてないでしょう？だから、産まなきゃいけないプレッシャーもないし。何が違うってそれが違う。」

「一番上の子のときは、(中略)吸引だったのね。それこそ産まされてる感じ？産んだっていうよりも出された。ああ出た、みたいな。2番目の時は、もう子ども出る気満々そこまで出てるのに、『先生来るまで、産まないで』って。なんで待たなきゃいけないの？って。」

「絶対出てくる言葉が『今産まないでね』っていうのが病院では出てくるの。(中略)自宅はまったくそれがなかった。なんか逆に、ああもう産んでいいんだっていうくらい、なんかそこでこうふ〜っと力が抜けちゃう。そこが違うかな病院と。病院はやっぱこう、『産まないで、今産まないでね。』って言われたのが、だめだめだめだめ、あ、出しちゃ駄目。もうストップを自分でかけてしまう。」

過去の施設における吸引分娩で感じた「産まされた、出された」という感覚や、「まだ産まないで」という医療者側の都合による言動は、よりリラックスできる自然で恐怖のない自宅出産という実感を強いものとした。また、自宅出産によって今までにない出産の感覚を感じていた。

b. 胎児、母親、助産師という「三角の力」を感じた出産

「ほんとにお腹のあかちゃんのペースでなすがままで。母親は、出ようとしてる力に対してじゃあ後ろからちょっと押してあげて、助産師さんはそれを受ける、受けとめるって感じ。だからほんとにお産の中心は赤ちゃんでそれを後ろから押すのがお母さんで、それを確実に受けとめてくれるのが助産師さんっていう三角だった。その感覚が不思議だった。ほんとに三角の力なんだ。出ようとする力と手伝おうとする力と、受けとめようとする

力っていう。だから全然苦痛じゃなかった。」

参加者は、主体である胎児が出てこようとする力、手伝う母親の力、受けとめる助産師の力を発見し、それを「三角の力」という不思議な感覚で受けとめ、さらに「三角の力」で分娩が進むことで苦痛は全くないと感じていた。

c. 胎児の生まれてこようとする力に身をまかせる

「生まれてくる子どもの力を信じてるっていうか。子どもがその気にならないと生まれないんだっていうのを思ったし、そのときかなあ？あ、出産で親がするものじゃないんだ、母親が決めることじゃなくって、赤ちゃんが決めることなんだって思ったから、生まれてこようとしてるのを、止めるのも変なんだって。お産っていうのがあたしとか医療が主体じゃなくてこの子が主体だった」

参加者は、胎児を出産の主体ととらえ、胎児の生まれてこようという力と気持ちを最優先する感覚で出産していた。

d. 家族みんなと一緒に感じた達成感とあったかい幸福感に満たされる

「すごいあったかくて幸せだった。(中略)それがねえ、すごい格別。産まされてるんじゃないで、産んだから、あ、すごいやり遂げたっていうのも1つなんだけど、そのやりとげた感が1人じゃなくって、お腹の赤ちゃんと一緒にやり遂げたっていう。」

「みんな『やったー』みたいな。みんなで頑張ったよね、良かったよねえみたいな、ああいうあったかい気持ち。ほんとにあったかいじわ〜んとした気持ちだったかなあ、出産終わった直後は。」

参加者は、出産を胎児との共同作業でやり遂げ、さらに家族とともに頑張ったという気持ちから格別な達成感、そして幸福感に満たされていた。

主テーマ5. 家族の変化から自宅出産の成果を感じる

a. 日常生活の中にお産があることを再認識できた出産

「普通の生活の中のところに出産ってというのがあったから、また普通の生活に戻っちゃう、気持ちが。だから、あったかいほわんとした気持ちの中に、ほら、みんな入っておいでよ、みたいな」

出産は、特別な出来事ではなく、あくまでも家族のいる日常生活の一部の出来事であった。そのため出産が終わると、また家族のいる普通の生活の中に気持ちが戻っていくということを感じていた。

b. 主体的に育児に関わるようになった夫の変化を実感

「自宅出産したことによって自分（夫）もお産に深く関わった、（中略）その空気をすべて一緒に感じ取って、主体的に参加してたっていうのは、色んな意味で、家族をつくっていく部分で強く感じたみたい。自分（夫）もそうなんだ、産むのはあたしだけでも縁の下の力持ち的な関わり方をしてきたっていうのがやっぱり違う。だからその後の育児に対しても、自分（夫）も主体的に関わっていかなければって、そこが一番違うのかなあ。母親と同じ目線で立てるようになったっていうか。」

夫は、出産の場で縁の下の力持ちとして働き、その空気を一緒に感じ取り家族を形成していくことを肌で感じているようだった。参加者は、夫が育児に対し母親と同じ目線に立てるように変化したことを感じた。

c. 命の重さを感じ取るようになった兄弟の変化を実感

「自宅出産をして…兄弟が仲良くなった。ものすごく一人一人を思い合うようになったっていうか。（中略）命ってどうゆうものなのかっていうのをすごく感じてるし、自宅出産を通して、ほんとにすごく身近になったんだろうねえ。」

「病院で出産するとお母さんと赤ちゃんって（家に）いないから、お兄ちゃんになる心構えをする時間が短いついていうか…自宅出産だと、出産直後からずーっと赤ちゃんがいるから。赤ちゃんが目の前にいるからお兄ちゃんになったんだっていう自覚はすごい早かった。」

参加者は、自宅出産を通して、子どもたちの関係性や繋がりが深くなったこと、生まれた赤ちゃんを受容することや姉・兄になる自覚が自然と芽生え、生命の重さを感じることができるようになったと感じていた。

以上より、妊娠から分娩終了までの時間軸に沿って自宅出産に至るまでのプロセスを示すと図1のようになる。

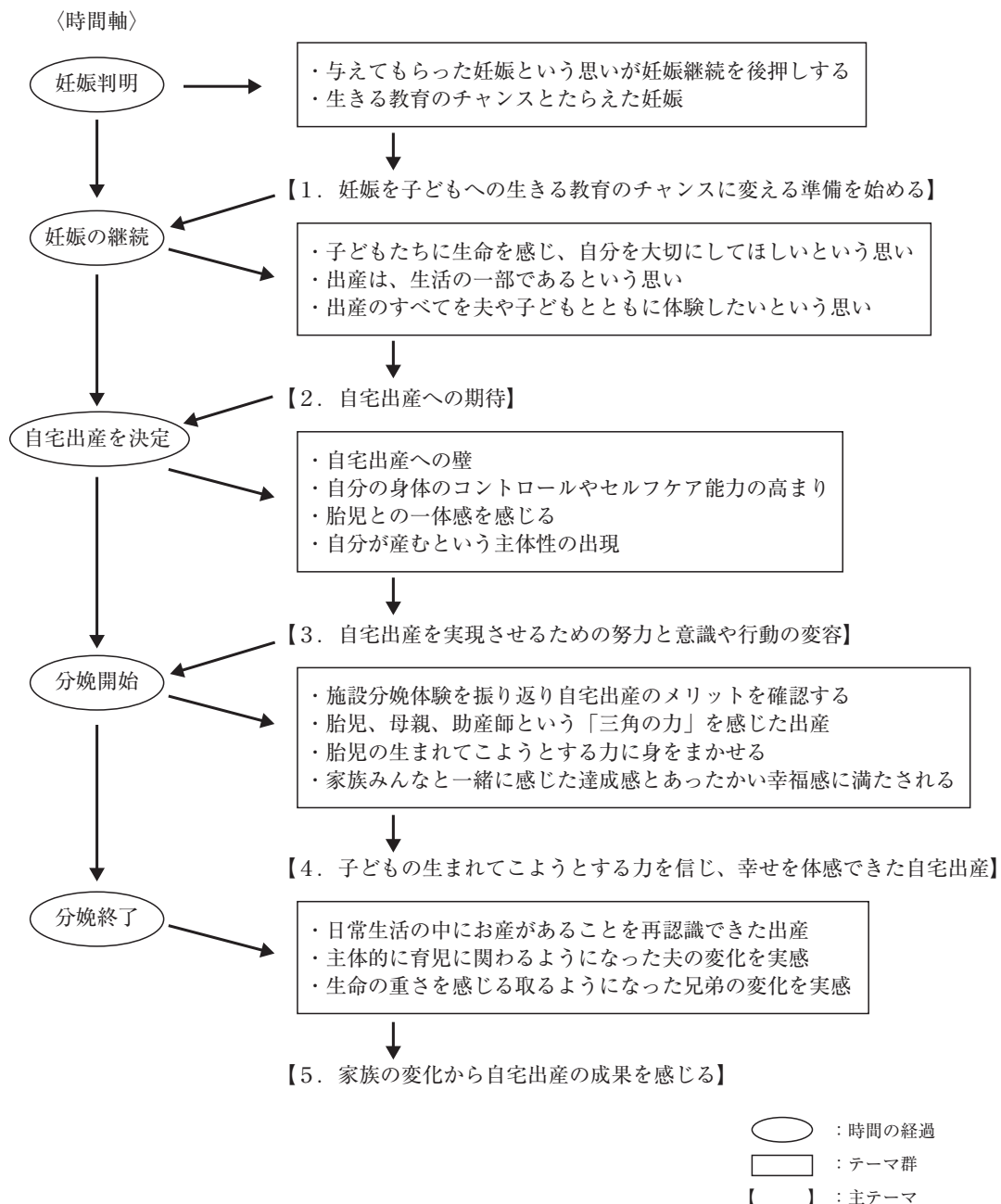


図1 自宅出産の体験のプロセス

VI. 考察

1. 妊娠判明から自宅出産を選択するまでの思い

参加者は、予期していなかった妊娠に困惑したが、妊娠を「与えてもらった」「授かった」と受け止め、むしろ、産むのは当然と考えた。そして、これまで4人の子どもたちに行ってきた生命の重さや生きることを教育す

る「生教育」の機会にもなると考えたことが、妊娠継続を決定させ、さらには、子どもと夫の立会いによる自宅出産への志向となったと考える。参加者のいう「生教育」は、河谷による、「自分がどのように生まれてきたか考え、命の大切さ、自分の大切さを教えたいという思い」である。

くわえて参加者は、子どもたちに出産そのものや児を迎える親の気持ちを教えてあげた

いと思っていた。しかし、今までの病院での立会い出産では、医療処置への立ち入り禁止や家族の立会い制限があり、自分の思いを果たせない体験をしていた。荒木は、自宅出産を選択した褥婦は、「家族と出産体験を共有したい」³⁾ 考えがあることを示しており、参加者は、家族との出産体験の制限のない共有を重要視し、自宅出産を選択したと考える。

さらに、参加者は、出産が家族のいる普段の生活の中や人生の一環として存在していることを子どもたちに伝えてあげたいと思っていた。これは、神谷が指摘する「自宅出産では生活の中にお産がある」ということや「自宅だからこそ、生活とすぐ隣り合わせにあるお産を体験できる」期待を参加者は自宅出産に抱いていたということが伺える。

また、矢島は、⁵⁾ 「お産の場は家族の場であり自分もこうして生まれてきたんだということを身体で感じてもらいたい。医療者はもっと積極的に家族が全員で新しい命を迎える場をつくっていくべきではないかと思う。」ということ述べている。出産は家族の1人1人が生まれてくることや命の誕生を考える良い機会であり、家族にとっての出産という視点での支援も重要だといえる。

2. 妊娠期の思い

参加者は、自宅出産を実現させるために、正常妊娠経過の逸脱予防として自分自身の身体管理に高い意識を持った。具体的には貧血や妊娠高血圧症候群などの予防のために、体重コントロールや食事への自己管理という行動につながった。これは、荒木が「自宅出産を実現するためには順調な妊娠経過をたどることが必要であり、前向きな自己管理に意欲を持って取り組むことが必要である。」⁶⁾ というように、自宅出産達成願望が自己のコントロールを促進したと考える。さらに、参加者は、自分の身体への意識の高まりとともに、胎児への思いや絆の深まりを感じ、胎児との

一体感を強固なものにしていった。これらのことは、参加者の「産まされる」のではなく自分が「産む」という出産に対する主体性を培い、後にみるように分娩時の「三角の力」の発見につながったと考える。

3. 分娩期の思い

参加者は、家族がくつろいでいる団欒の中で分娩の進行を感じながら、これまでの出産における「産まされた、出された」という感覚や、「まだ産まないで」という医療者側の都合による言葉をうけることなく、「リラックスできる」、「自然である」という感覚を持ち続けながら、恐怖や緊張、痛みを感じない出産を終了していた。この参加者の状況は、長谷川⁷⁾の指摘する「多くの女性が出産体験を痛くて辛いといったマイナスなものを受け止めているが、出産を肯定的に受け止めている女性の心理の背景には、心身の苦痛よりも快感が勝り、不安よりも期待が勝り、恐怖感よりも安心が勝っていたという事実があったのだと考えられる」ことである。

参加者は、児の生まれてこようとする力を信じ最優先にして、児の生まれる力、母親の手伝う力、助産師の受け止める力という「三角の力」を感じていた。そして、児との共同作業としてやり遂げたという格別な達成感により、幸福感や満足感に満ち溢れていた。これは、瀧澤⁸⁾の「赤ちゃんは生まれるとき、生まれるように生まれる。私たちは生まれてくる赤ちゃんへの視点をもっと重要視し中心にすべきだと思う。待つことは最大限の積極性である。」としており、参加者は「三角の力」として胎児の力を充分に感じていたと考える。

分娩終了後には、自宅出産を決定した時に考えていたように、家族のいる日常生活や人生の一環に出産があったことを再確認していた。さらに、参加者は、夫が、縁の下の力持ちとして参加者を支え、家族とともに家族形

成を実感できたことによって、夫の育児への主体性の高まりや母親と同じ目線で子どもと関わることへつながったと感じていた。このことは、田島⁹⁾の指摘する「夫がお産に立ち会うことで父性が向上し父親役割がスムーズに獲得され、育児参加が多くなる。」ということである。今後、父親に対し、父親としての役割獲得がスムーズにいくことが期待できると考える。

また、参加者は、子どもたちがお互いのつながりを深め、生まれてきた兄の受容および兄・姉になる自覚が自然とでき、命の重さを感じることができるようになったと感じていたことは、河谷¹⁰⁾による「子どもの立会い分娩によって兄・姉としての心の準備や家族の絆・役割についての教育の機会となることが期待される」を裏付けるものである。このことから、参加者が自宅出産への期待の1つであった「生教育」の達成が図られたと考える。家族で新しい命の誕生を迎えるということは、すでに生まれた子どもが兄弟を円滑に受け入れることでもあり、そのために家族で一体感を得られるような援助は重要である。

以上より、分娩における産む母親、生まれてくる兄を中心として、立ち会う家族（夫、子ども等）、それぞれの相互作用を最大に引き出すキーパーソンは、産む親や家族に最も寄り添える助産師に求められるのではないかと考える。

VII. 結論

本研究は、自宅出産をした参加者の体験に焦点を置き、参加者の「語り」を明確化し、その中心的意味を見出すことを目的とした質的研究である。本研究の参加者は、5人目を自宅出産した女性1名である。参加者の自宅での出産の決定における心理過程や妊娠期・分娩期・出産後の自宅出産における体験をありのままに記述することができた。分析の結

果、自宅出産を選択した女性の思いとして【妊娠を子どもへの生きる教育のチャンスに変える準備を始める】【自宅出産への期待】

【自宅出産を実現させるための努力と意識や行動の変容】【子どもの生まれてこようとする力を信じ、幸せを体感できた自宅出産】【家族の変化から自宅出産の成果を感じる】という5つの主テーマが見出された。

この体験を明らかにすることで、出産は母親となる女性にのみ重要な出来事ではなく、家族の絆の深まりやそれぞれの役割獲得につながることにもなっていた。また、援助者は、家族にとっての出産の意味や、生まれてこようとする兄の力や気持ちにまなざしを向け、母親だけでなく家族にとって出産がより良い体験となるような援助も忘れてはならない。

また、自宅出産遂行のための妊娠・出産に対する主体性の高まりは、自ずと自己の身体のコントロールやセルフケア能力を高めるだけでなく、胎児との一体感をも高めることにつながっていた。

本研究は1人の女性を対象としており、内容には限界があること、カテゴリーの一般化にも課題がある。しかし、その人の「主体性」を尊重する関わりが、安全、安心、満足のいく出産につながることを示唆されたと考える。出産する場所にかかわらず、産む人の主体性を引き出し育むことが今後も重要だと考える。

謝辞

本研究への参加に承諾くださり、貴重な体験をお話くださった参加者に心より御礼申し上げます。

注・引用文献

注1) 自宅出産とは、出産する場所が自宅であること。自宅出産できる人は、母児ともに妊娠中から異常兆候が見られない正常経過の人に限定されている。自宅出産をする場合、引き受けてくれる助産師と嘱託医を探さなければならない。

注2) 施設出産とは、出産する場所が病院、診療所、助産所であること。助産師や医師を探す必要はない。異常の時にすぐに医療が受けられる体制にある。

- 1) ホロウェイ・ウィーラー著. 野口美和子訳. ナースのための質的研究入門. 128-135. 東京: 医学書院;2004.
- 2) 河谷麻貴・平井愛子・馬渡佐知枝ほか. 性教育の視点からみた子供立ち会い分娩の効果. 母性衛生. 2003;44(4):472-480.
- 3) 荒木尚子・野口めぐみ・湯本敦子ほか. 自宅出産をした母親の自宅出産を選択した理由とその実現のための要因. 日本看護学会論文集. 母性看護. 2005;36:152-154.
- 4) 神谷整子. 「自宅」という空間と正常なお産. 助産雑誌. 2005;59(4):304-309.
- 5) 矢島床子. 身も心も高い満足度. それが正常産. 助産雑誌. 2005;59(4):320-325.
- 6) 荒木尚子・野口めぐみ・湯本敦子ほか. 自宅出産をした母親の自宅出産を選択した理由とその実現のための要因. 日本看護学会論文集. 母性看護. 2005;36:152-154.
- 7) 長谷川文・村上明美. 出産する女性が満足できるお産. 助産院の出産体験ノートからの分析. 母性衛生. 2005;45(4):489-495.
- 8) 田島桂子. 立ち会い分娩がもたらす精神的影響. 母性衛生. 1995;36(1):131.
- 9) 前掲2).
- 10) 前掲2).